

近頃の若い者を鍛えるには

山梨大学教授 伊藤 洋

地雷・工兵 その昔、国民学校の児童たちに人気の「地雷・工兵」という遊びがあったのだが、もはや余程の年配者でなければ知らないであろう。軍国主義の影響だろうが、軍人の位を名刺大のカードに書いて、それを対戦相手に遭遇したときに見せ合うのである。元帥だの、大将だの、少将だの、果ては中尉から少尉までである。大尉を出した者が、相手から少佐で対抗された場合には大尉は没収される。ゲームの勝敗は最終的にカードを沢山所持していることという、至極単純なゲームであった。

カードの中には軍人だけでなく、地雷と工兵というのもそれぞれ配られている。地雷は、元帥を含むすべての軍人に対して絶対的な強さを発揮する。一方、工兵はというと、いかなる軍人位階に対しても最下位であって、全てに敗北するのであるが地雷に対してだけは勝者になれるのである。このように、軍人集団、地雷および工兵は三すくみの関係になっているのでゲームが成り立つのである。

このような遊びが、いつ頃生まれたのか、他の地域にも有ったのか無かったのかなど、筆者は寡聞にして知らない。ただ、筆者の身边では戦後も時折子供たちの間で流行が繰り返されていて、公職追放で役に立たなくなったはずの父の名刺の裏側でこのカードを作って大目玉を食らったのを今でも記憶している。

いきなり、懐古趣味から入ったのは他でもない、この「工兵」の役割の偉大さを話の接ぎ穂にしたからである。自分より階級の高い全ての者が勝てない地雷にたったひとり勝てる能力の工兵

= エンジニアとは、実に魅力的な人物像であったからである。

日本の近代化 マックス・ウェーバーによれば、近代資本主義を育んだのは、プロテスタンティズムの布教地域にあって、禁欲という倫理に導かれながらただ黙々と神に命じられた神聖な仕事 = 天職 (Beruf) と呼ばれる高い技能労働をした人たちだったという。神の仕事ゆえに、改善や改良、すなわち技術革新は善であり、革新的技術に対して投資をすることも善であり、そういう善行を積み重ねることによって資産家になることすら善であった。こういう環境の中で産業革命がぼっ発し、そこに起業家を育てるための金融市場が生まれ、そこで一儲けした成金資本家でさえも、天職に忠実であったことの証と解釈された。それゆえ、カソリックには最近までつきまとった金銭の不浄観は聖別され、禁欲的プロテスタンティズムの精神とは真反対の強欲資本主義を受け入れることに成功したというのである。

マックス・ウェーバーのこの説によれば、キリスト教に無縁な地域では近代資本主義は成立しないことになるが、日本や韓国のように非キリスト教でありながら近代資本主義を受け入れ、発展させた地域もある。そういう地域では何が代替したのであるだろうか。

筆者は、これらの地域にもプロテスタントの倫理と等価なそれがあったからだと考えている。それこそ、冒頭の「工兵」的階級で、中世的身分社会の中では決して高い地位ではないが、黙々と技能を磨く精神が有って、それがこの国の近代化を

育んだのではないかと考えている。

工部大学校や蔵前高等工業をはじめ明治大正期の技術者養成学校の学徒の出自を見ると、当然のことながら農家出身者が非常に多かった。特に中山間地の自作農の次参男坊が多かったといわれている。

自作農 (= 中農) の生活は決して豊かではなかったが、そこでは自給自足農業ゆえに一所懸命に働くことと、浪費をしないこと、農業技術について不断の改善や改良を施すことによって生活の改善が可能であった。中世の長い期間に家系の中に育まれたこの一所懸命と技術改良の中農精神が、技術者として西欧近代の技術導入に大いに適応的だったのではなかったか。

「一所懸命」は農地田畑という場所にかかわっての精神であったが、明治になって往来が自由になると農村を離れ工業地帯に居を移し、中農の禁欲と、人生を仕事に没入させる「一生懸命」の勤勉さと、先祖伝来の進取性を発揮することで、この国を世界第二の工業国家にまでのし上げたのではなかったか。そして、冒頭の「地雷・工兵」の工兵はこういう技術者の、戦場での地位と役割を象徴していたのではないだろうか。

バブル崩壊 しかし、所詮中農の禁欲の倫理という程度のことであり、そこから作り上げる資本主義の精神というものもそう深遠なものではない。結果はバブル経済に巻き込まれ、カジノ資本主義に侵食され、モラルハザードを惹起して、「失われた10年」などという負の歴史を作り出してしまった。そして、あるうことが大学まで、わけても「中農」の倫理で成り立っていた技術系学部までが、いつの頃からかキャンパスのレジャーランド化と学生の学力不足・科学精神の欠如という多重苦に悩まされるようになってきた。

思えば当然で、この国で中農などという存在は絶えて久しいのだから、その倫理に頼るなどは原理として不可能である。自分の生活の基盤が何によって出来上がっているのかすら分からないような学生が入学してくる。職業観といったものも、家庭や中等教育機関などのどこでも教えられることは無かったのだから、それもまた当然なのである。かくて、年齢のわりに幼児性が目立ち、アイ

デンティティが未確立で、未来へのパースペクティブを持たず、何をするために大学に入学したのかもよく認識していないというような若者が多数を占めるようになってきた。そして、この種の学生は決まって学業成績が不振なのである。

退学勧告制度 このような状況の中で、山梨大学工学部では約2年半をかけて「早期退学勧告制度」なるものを作った。すなわち、病気その他やむを得ない事情が無いにもかかわらず、入学後1.5、2、3および4年終了時の全取得単位数が、それぞれ30、40、55および70単位未満の者、及び5年次終了時に卒業論文履修条件を満足できない者に退学を勧告することとした。これは極めて緩やかな規定であって、各学年にあって単位取得状況がこれ以下ではまず間違いなく卒業延期になるという数値を基準として決定した。

これを昨年度前期終了時に適用してみると2,649人の学生中104人の学生がこれに抵触していることが判明し、それらの学生と保護者に試行的に退学を勧告した。その結果、30名の学生が学園を去って行った。なお、この制度の本格導入は2002年9月30日を予定している。

ただし、退学を勧告するといっても、これを学則上は懲戒事項としては定義しておらず、休学や留学などと同じ自己都合の範疇に入れてあるので、一年以上の社会人経験を経た後に、大学で学ぶべき目標、学ぶ意味、学べることの喜び等が理解できるようになったら、無条件で再入学を認めることとしている。

これを要するに、筆者は軽い気持ちで大学に出たり入ったりしてもらえばよいと考えている。大学を期待通りの成績で卒業したといっても、どのみちこの技術革新の激しい時代、大学で学んだ知識の賞味期限は極めて短命である。一説によれば、IT技術の耐用年数は4年未満、最も長いといわれている土木工学でも8年しかないそうだ。このような時代に大学を「卒業する」という意味が果たしてあるのかということがすでに問題である。学力不振は論外だが、全生涯にわたって折にふれ大学に入ったり出たりしながら人生をやって行く生涯学習の時代がとっくに来ているのである。そ

れなのにまだ学歴を求めて大学の門を叩き、しかも学力低下だの不振だのと難詰されているのは実に馬鹿馬鹿しい。人は、人生の何時の時点でも高等教育を受けたいと心底思ったときに大学に入学すればよい。それが個々人の学習の旬なのだから。

その結果 このように山梨大学工学部では、試行といいながら事実上早期退学勧告を実施している。そこで実施半年後の2002年3月にその効果を探ってみた。

無作為に抽出した教官16名に、退学勧告実施前の2001年度後期と同じ科目について、実施後の2002年度後期における授業の出席状況と成績評価の平均値を調べて報告してもらった。その結果を図に示す。図の横軸は、成績のパーセントポイント変化率で、正は2001年度より2002年度の方が成績が好転していることを示している。また、同様に縦軸は授業への出席率の変化をパーセントポイントで表し、その正の値は2001年度より2002年度の方が出席率が増加していることを示している。

図を見ると、全体として第1象限に点が集中していることが分かる。これは、退学勧告制度の導入を機に、授業への出席率が向上し、学業成績も向上して、正の成果が現れているためと思われる。もとより一回だけの調査で確認できるわけではないが、よい成果に結びつく可能性があることをこのデータは暗示しているものと筆者は善意に解釈している。

学生たちに直接意見を聴取した結果でも、ほぼ肯定的であった。その中で特筆すべきものとして、大学が「ダメなものはダメ」というメッセージを送ってくれたことを歓迎するというものであり、それが意外に多かったことである。

現代の学生にとって、模範とすべき大人の像が存在しないということがある。模範とまでは言わないとしても講義室における教官という人生の先輩が、単位を与奪する絶対者としては映っていても、自己の人生に係わって身近な指導者ともつゆ思っていない。星の数ほど歴史年表に載る偉人はいても、変化の激しい今日、過去の偉人達の生き方が、未来において学生たち自身の有益なモデルとなりそうにも感じられない。まして周囲も含めて緊張を欠いた日常が、キャンパスの中で単調に繰り返されている。にもかかわらず誰からも、注意を喚起されることは無かった。それは見ようによっては一種の疎外でもあった。そこへ、青天の霹靂のように「退学勧告」という「リーズナブル」なNGが発せられたというのが偽らざる実感のようである。

ところで、この制度を教官側に照らして見たとき、果たして退学を「勧告する」に値する内容の濃い講義をしているのか、若い学生たちから見てそれに人生をかけたくなるような深々たる興味を喚起する内容を教えているのか、必ずしも疑問なしとはしない。その意味で、本制度の導入は、教官にとっては天に向かって吐いた唾である。それゆえ、教官層が本制度を受容したことは、とりもなおさず「良い授業」を行うことを決意したのであり、山梨大学工学部としては、今後優等な学力の学生だけを世に出すという社会的なメッセージも発しているのであって、それこそがこの制度検討の最大の成果だと筆者は認識している。

成績変化率と出席率変化率の散布図

